

別題「執着獅子」

花飛び蝶驚けども人知らず

〔三下り〕 我も迷ふやさまざまに、四季折々の戯れは、蝶よ胡蝶よせめて暫しは手にとまれ、
見かへれば花の木蔭に、見えつ隠れつ羽を休め、姿やさしき夏木立
心づくしのな此の年月を、いつか思ひの晴るるやと、心ひとつに諦めん、よしや世の中
短か夜の夢はあやなし其の移り香の、にくたておろか主なき花を、何のさらさらさらに恋は
曲者

露東雲の草葉に靡く青柳の糸しほらしく、二つの獅子の身をなでて、頭をうなだれ耳をふせ、
花に宿借る浮世の嵐、彼方へ誘ひ此方へ寄りつ園の胡蝶に戯れ遊ぶ、己が友呼ぶ獅子の駒
花にうつろふ恋の胡蝶の舞の袖
恋すてふ比翼連理の可愛らし

〔桜尽くし〕 大宮人の庭桜、檜扇かざす緋桜の、地主の桜や瀧桜、月の影さへ明石瀉、
人丸桜袖硯、筆の命毛墨桜、誰が小桜や憎からぬ姨桜花桜

名^なとりの廊^{くるわ}に弾^ひく三^{さん}味^みの、手^て鞠^{まり}桜^{ぎくら}のはづみよし、思^{おも}ひ初^そめたよ糸^{いと}桜^{ぎくら}、君^{きみ}の名^なのみ聞^きく桜^{ざくら}、
ふたり^{ふたり}こひ^{こひ}やまぎくら^{やまぎくら}の山^い桜^{ちかひ}、祈^{いの}る誓^{ちかひ}も伊^い勢^せ桜^{ぎくら}、色^{いろ}も変^{かは}らぬ紫^{むらさき}の江^え戸^ど桜^{ぎくら}家^{いへ}桜^{ぎくら}

おもしろ
とき
いま
ぼたん
はな
さ
みだ
ち
ち
く
はな

面白や時しも今は牡丹の花の、咲くや乱れて散るは散るは、
散り来るは散り来るは散り散り

散りかかるやうで、おいとしようて寝られぬ、花見て戻ろ花見て戻ろ、花には憂さを打忘れ
ひとめしの人目忍べば恨みはせまじ、ため為に沈みし恋の淵、こころがら心柄なる身の憂さを、やんれそれはそれはへ
誠や憂や辛や

朝あさな夕ゆふなに写うつす鏡かがみのよい金きん性しやうと私わたしは水すい性しやうでお前まへと深ふかい
それうたがを疑うたがふことかいな、さらりと柳やなぎにやらしやんせ、柳やなぎに柳やなぎにやらしやんせ、思おもひ廻めぐらせば
昔むかしなり

〔石橋〕 牡丹に戯れ獅子の曲、実に石橋の有様は、唱歌の花ふり簫笛琴箏篳、夕日の雲に
聞こゆべき、目前の奇特あらたなり

しばらま
 暫く待たせ給へやと、やうがう影向の時節も今幾度によも過ぎじ
まひことらでん
 〔団乱旋〕 舞子図乱旋の舞樂のみぎん、舞子図乱旋の舞樂のみぎん、ぶたん牡丹の花房はなぶさ匂ひ満ち満ち、
ししがしら
 たいきんりきんの獅子頭

うてや囃せや牡丹ぼうぼう、くわうきんの瑞あらはれて、花に戯れ枝に臥し転び、実にも
上なき獅子王の勢ひ靡かぬ草木もなきときなれや、万歳千秋と舞納め、万歳千秋と舞納め、
獅子の座にこそ直りけれ